

眞青な中より實梅落ちにけり

藤田湘子

単純明解、一読景の立つ句である。「俳句は意味じゃない。リズムだ」と言っていた湘子の面目躍如の句。しかし、この梅は青梅か、熟れた実梅なのか、今にして疑問が出てきてしまった。

梅林へ梅の花を訪ねたことはあるが、梅の実の生る頃に行つた記憶は定かではない。しかし、この句を読むと、たしかに青い実が見えてくる。梅雨頃の梅林、眞つ青な葉が茂っている。その中に青梅の実がぎつしり付いている。中には薄黄色に熟した梅がかすかな芳香を放っていることもある。それが落ちたのだろうか。

いずれにしても、一粒の梅の実が落ちた瞬間の空気の動きが感じられる。紛れもない重力の瞬間が見える。

1985年 (s60.06.19作) 第八句集『黒』 鑑賞・野本京